
転生の王子様

841

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生の王子様

【Nコード】

N3292X

【作者名】

841

【あらすじ】

とある日俺は定番の神ミスで他界。転生させてくれるはいいが、俺は平和な所がいいんだ！……ということとで生まれ変わった所はなんとテニプリ。まあ此処に来たんだからテニスくらいはするかあ、と考えている呑気な少年のテニプリライフ、見てみますか？

誕生した王子様

人って死んだらどうなるのだろうか。そんなのを考えた事がある人、俺が答えを教えてやろうじゃないか。

あの世パターンもあるらしい。だが、神様ってやつが失敗をして死んでしまうつて言う、小説では定番のパターンもあるらしいんだ。さて、俺はどうなのかねえ。目の前にはおじーさんが一人。

「すいませんでしたすいませんでした、すいませんでしたああっ！」

「いや、そこまで必死にならなくても……。で、何故俺はこんな場所に居るんですか？」

こんな場所、つて言うのはこの真っ白い空間の事ね。おじーさんと俺の二人ぼっちの空間でございますよ。……アレ、自分で言うておいてなんか虚しいぞ？

「いや、その……ミミミ、ミスです……」

「はい、わかりましたー」

やはり定番だった！え、でも俺もうちよつと生きれてたんだよねあ。そう考えるとマジショック！

いや、こんな俺にも一応彼女という者はいたのでね？腰まである綺麗な黒い髪に、ビククリするほどに大きい目。小顔で足がすんげ

え長かった。とにかく良い彼女だったのよ！性格も良いし！

「そ、その……」

「んえ？あ、転生させてくれんの？」

「そ、それくらいで済むのなら……」

それくらいで済まないぐらいの大ごとなのかよ！？……まあ、いか。

「ただ単に平凡な世界で良い。バトル系とか、行っただけで死にそうな所は絶対にお断りしておきます。平和に過ごせそうなところな？」

「わ、わかりましたあーっ！」

熱いね、おじーさん。そんなにミスってやつは大きかったのかい？

気づけば俺の視界は暗くなっていた。……マジでいつの間だよ。まるでついていた電気を、急に消された感じがな？

……いや、違うな。俺、目え瞑ってる。無意識！？無意識ってなんか恐くないっすか！？

「あ、おかーさん！動いた！動いたよ！」

「ホントねえ。フフフツ。話しかけてみたらどう？反応してくれるかもよ？」

「う、うんっ！」

およ？何の声だ？男の子の声と、優しい女の人の声。……でもってココ何処だ？

「お、おにーちゃんだよ？げ、げんきにつ、うまれてきてね？」

おにーちゃん？うまれてきてね？……ああ、転生小説なんて何度も読んだ事があるから、こういう状況かわかった……。

ここはまさかのお腹の中かよ！？つーかここは何処の世界だよ！？

「うっ……。お、お腹が……っ」

「わあああっ！？お、おかーさん、だいじょーぶ！？お、お医者さん！？」

ん！？お、女の人、大丈夫か……ってアレ？これは……まさかの……！

生まれるパターンですか！？

おう、なんだか気が遠くなってきた……。アー……。

「生まれましたよ！元気な男の子ですッ！」

「う、うまれた……」

……んお？あれ、俺ってば気でも失ってたのか？って、何故だ！
涙がこみ上げ……、

「オギヤアアア！オギヤアアア！」

「あ、泣いた！良かったあ……泣かないからビックリした〜！」

「ウオギヤアアア！？オオギヤアアア！」

「ぬおっ！？すごい元気な赤ちゃんですね！ウオギヤアアって泣いてますよ！」

「元気で良かったわあ……っ」

なんだこの美人なお母様は！？でもって俺はなぜ……なぜ！？

ダメだ、言葉にならない！でもって涙がとまらない！んだあああ、
ダメだ！とまらない……！

「名前は決まってるんですか？」

「フフ、まだなのよ……どうしようかしらあ？」

後に聞いた俺の名前は、ようた。漢字書きではわからない。

まあ、そのうち分かるだろうし、いいや。……というかさ、マジでここはどこなんでしようかね？

確信した王子様（前書き）

どうも、841です。

転生の王子様、第2話でございます。

そして、なんと……お気に入り登録が4件!!感想が1件!!
ありがたい限りでございます。

これからも一生懸命頑張っていきます!

では、どうぞ。

確信した王子様

「よーた！」

明るい声で俺に話しかけてくれんのは、周兄^{しゅうけい}。何故かいつもニッコニコしている一見人づきあいよさそうな兄さん。

こちらの世界に生まれ変わった俺は、今現在5歳。周兄は7歳で、もう1人上の兄さんは裕兄。

「テニスしようよ！」

「……テニス？周兄、俺、テニスには興味無いんだけどなあ……」

「絶対によーたのセンスはいいってば！僕が教えてあげる！」

無理矢理ぐいぐいと腕を引っ張られ、連行される。

というか未だにここが何処か分かんない俺。あ、でもうすうすわかってんだよ？だけど自信もってはいえないんだよねあ。

「よーた！聞いてる？」

「えっ！？ご、ごめん、周兄！」

「全く……陽太はすぐに物思いにふけるよねー」

ムスツと言った感じの周兄。ごめんね、周兄ー。俺、精神的な年

齡絶大だから！

こう見えても赤ちゃんのころはすごく頑張ったんだけど！？だって俺、本来は赤ちゃんなんかじゃねえんだからな！？もっいろいろと頑張った！うん！

「……陽太、聞ってるの？」

「へ？」

「よーたっつー！！」

「うわあああつ、ご、ごめんってばあつ！周兄ーっ！」

「兄貴！俺にも……って陽太、どうしたんだよ？」

「裕兄ー！助けるおおおおっ！！」

「裕太っ、陽太を捕まえてほしいんだけど！！」

こんな俺、不二^{ふじ}陽太^{ようた}の日々。

至って平凡であり、意識を何処かに飛ばしてしまつて、周兄に追いかけてまわされる日々である！

「ほらっ、よーた！こうやってラケット握るんだよ？聞ってる？」

「聞いてます聞いてます！」

テニスかぁ……。そういや、元いた世界にテニスの王子様って漫

画が……。

……って、漫画が……。たし、か……。あつたよな？すぐに飽きて
ポイした様な気もするんですけどね？

そこに……。不二、周助は……。うーんと……。

「陽太……聞ってるの？」

「聞いてます！」

お願いだから開眼しないで、周兄。マジで怖いから！

話を戻して……。いたような気もするなあ。そう言えば俺、桃つて
やつが何故か好きだったんだっけ？でもって……。どんなストーリー
だったっけなあ？

確かスーパールキーがやってきて……。様々な敵と戦って……。強
くなってくみたいなの？

「それだあつ！！」

「え！？何がそれなの、陽太！？」

「あ、ごめん。なんでもないよ」

たぶんここはテニプリの世界だ。テニスが中心の世界か……。。

此処に来たからには、テニスした方が良さそうだな。いろーんな
意味であるが。

「……はい、陽太。今の奴、繰り返してみて？わかるよね？」

「え？あ、その……」

「わかるよね、ちゃんと話聞いてたんでしょ？」

「え、えと……」

「よーた……！」

「ごっ、ごめんなさい、周兄ーっ！」

絶対俺嫌われてるよね、周兄に！！話聞かない弟だ、見たいな感じで！

とりあえずラケットを改めて握り、俺は周兄にテニスを教えてもらう。一度調子に乗ってラケット振り回したら頭を軽くごつかれた……。

「陽太は、きつとうまくなるよ」

「そう……かなあ？エヘッ、ありがとう！周兄！」

なんだかんだ言っても周兄はすごく優しいんだ！！俺の自慢の兄さんさ！！

あ、もちろん、裕兄も自慢の兄さんだからな！？忘れちゃだめだぞ！？

確信した王子様（後書き）

不二の弟設定になりました。

手塚・幸村・不二・越前・跡部の5人で迷ったのですが……。

越前は1年生なので同時に中学には入れないし……。

手塚はまあ良かったのですが、なんか難しそうで……。

跡部は841があんまり好いていません（

幸村は……とにかくヤバそう。だって五感ですよ！？ゆっきーのテニスは五感を奪うんですよ！？

と言う事で、名前も先に「ようた」に決まっていたし、「ゆうた」と似てるし。

不二でいいか、という考えにまとまりましたvv

今回短いですね……。長い文書くのとてしんどいです。

読んで下さり、誠にありがとうございますっ！！

裕太と王子様（前書き）

今回は裕太が中心です。

ページが増える様頑張りますッ！

裕太と王子様

あれから月日は経ち、俺は小学6年生になった。周兄さんは中学2年生、裕兄さんは中学1年生。

兄さん達に対する呼び方も変わったし、テニスの実力も変わった俺。

この間、周兄さんと全力で試合をしたんだ！とにかく周兄さんはすごかった！でもって、俺の体から妙なオーラが出た！いや、現実逃避じゃないよ？

で、結果は！なんとか俺が勝った！終わった後は疲れきって倒れたけど、すごくうれしかった。

「にしても周兄さん、強かったなあ……」

「……ねえ、知ってる？独り言を言う人ってエロイんだよ？」

「は！？」

人が嬉しさに浸っているときに何を言うか！？

いきなり口を挟んできたこいつは、小林柚子^{いばやうすけ}。テニススクールで知り合った女子で、結構仲も良い。ちなみに柚子は結構テニスがうまい。

肩くらいまでの茶色い髪と、丸く綺麗な黒目をもつ柚子は、結構男子からもモテる様だ。

「いや、ちよつと嬉しい事を思い出しててな？」

「ふーん。そんなに嬉しい事だったんだ？」

「そりゃあもう！」

なにしろあの周兄さんに勝てたんだ！ぎりぎりだったけど、やっぱり嬉しい！

「なに？テニスで誰かに勝ったの？」

「……お前つてやつぱり勘いいよな」

「あ、あつてたんだ？」

柚子の勘は良く当たる。そりゃあもう恐ろしいほどに。

「まあ、どうでもいいけど、もう下校時間なんだよね。私、今日当番なの。早く帰ってくれないと、私が帰れないんですけど？」

「あー、はいはい。帰るつて。帰ればいいんだろー」

黒いランドセルを背負い、俺は教室を出る。

あ、そういえば、変わった事がもう一つあった。……裕兄さんの事だ。

裕兄さんは、元いた学校、青春学園を去ってしまった。そして、家をも出て行ってしまった。理由を聞いたけど、二人とも表情を沈めるだけで、答えてくれなかった。

何処に居るのかも、何があつたのかも俺には分からない。……原作覚えておけばよかった。

「……はあ、俺ってホント馬鹿だなあ」

つくづく自分に呆れる。……って気づけば校門出てたし。やっぱり無意識って怖いな！

裕兄さんに会いたいなあ……。何処に居るんだろうな……。

「……陽太？」

「え？」

この声は……裕兄さん！？

期待を込めて振り返れば、そこには久しぶりの裕兄さんの姿があった。

裕太 side

俺には、一人の兄貴と一人の弟がいる。

兄貴も、弟の陽太もテニスがうまい。特に陽太は、あの兄貴に勝つたらしい。

正直、悔しかった。俺じゃなくて、陽太が兄貴を先に倒したんだと思うと。でも、それと同時に嬉しかった。

陽太は、始めは全くテニスに無関心で、やり始めてからもあまり興味は見えなかった。そんなアイツが、今では兄貴に勝てるほどに強くなっている。本当にうれしいんだ。

でも、俺は兄貴より強いなんて事はない。それに、俺は中学に入ってから……。

「あ、おい。あの不二周助の……」

「知ってる。天才・不二周助の弟で……」

「不二周助の……」

「天才・不二周助の……」

天才・不二周助の弟、としか俺は見られていなかった。

はじめは耐えることができた。でも、次第に耐えられなくなったんだ。

そんな時だった。「聖ルドルフ学院中学校」テニス部の観月さんから、ルドルフに来ないかとスカウトを受けた。

もう耐えることができなくなっていた俺は、無論そっちに移った。

この事を兄貴達に言ったときは、酷く驚いていたっけ。

「陽太は……どうするの？」

兄貴に言われた、一言言われなくなかった言葉だった。陽太には、絶対に知られなくなつた。

言えばアイツは、俺を待つと思うから。俺は帰るつもりはない。だから、そんな期待なんかはさせたくないんだ。

アイツの笑顔を、俺が消したくない。

ってダメだな。気分でも紛らわせないと……。散歩にでも行くか？

「そっち行つたぞー！」

「オーライオーライッ！」

野球をしている小学生の姿が目に入る。……小学生、か。

陽太も卒業式が近いよな？ 見には行きたい……けど、無理か。

最近、アイツの笑顔も姿も見えてないけど、元気かな？ なんて思つてた時だった。視界の隅に、見慣れた背中が映る。

もしかして……？ と期待をして、その背中に近づき、声をかけてみる。

「……陽太？」

「え？」

やっぱり期待通りだった。陽太だ。

俺がずっと見たかった笑顔を、陽太は一番に見せてくれた。

「裕兄さん！」

「元気そうで良かった。今、帰りか？」

「まあなっ！」

嬉しそうに笑ってくれる陽太は、本当に変わっていない。どちらかと言えば兄貴に似ている容姿だけど、口調は俺似らしい。

「裕兄さんは……元気で、やってんの？」

「あ、まあ……」

だんだんと陽太の表情が暗くなっていく。……どうしたんだ？

もしかしてコイツ、俺が家を出て行った理由を知らないのか？ ああ、そういえば。俺が理由を兄貴達に話した時、兄貴、陽太にいいたくないって顔してたっけ？

「……裕兄さん、なんで帰って来ないんだよ？」

「……っ」

相変わらず直球な俺の弟。
ストレート

「周兄さんや由美姉さんにも聞いたんだけど、教えてくれないんだから、裕兄さんに直接聞くよ」

「おま、相変わらずストレートだな？」

「え？……そう？」

やっぱり陽太は変わっていない。どんな時でも、俺を笑わせてくれる。

そんな陽太が俺は大好きだから、こんなにも悲しませたくないなんて思うんだろうな？

「悪いけどさ、陽太。……今は、言えないんだ」

「え？なんで？」

きょとんと言った感じで聞いてくる陽太。

「なんでもだ。でも、俺は帰らない。今は寮で暮らしてるんだ。そっちの方が落ちつくし、俺はそこにいるつもりだ」

「……そうなんだ」

俯いてしまった陽太。だから言いたくなかったんだよ……。

「よ」

「じゃあ、さ？」

パツと勢いよく顔をあげて、陽太はいつもの陽太らしい笑顔を見せてくれた。

「とにかく、俺は待ってるよ」

「だから、帰るつもりはないんだって……」

「でも、待ってるって!」

やっぱりこいつは、予想通りの答えを言う。ほんっとわかりやすいな。

「だって俺、待つことしかできないだろ?」

「はぁ……。全くお前はさ……」

「はいはい、馬鹿でごめんな? 裕兄さん」

「……………」

でも、正直言つと嬉しいんだ。きっと何処かで、陽太に忘れられるのを怖がってたんだ。

それでも、陽太が待ってるって言うてくれたから、今、すごく体が熱い。

……馬鹿でわかりやすく、二人の兄よりもテニスの上手い弟。

でも、そんな弟の事が俺は大好きだ。たぶん、いやきつと、兄貴

も同じだと思う。

辛い時、一番に笑顔をくれるの陽太だから。俺だって昔からそう
だ。それに、ほら、今もだ。

「……ありがとうな」

また陽太のおかげで、心が少し軽くなった。

s i d e o u t

……久しぶりに裕兄さんと話せて凄く嬉しかった！

やっぱり裕兄さんは優しくて、変わって無かった！しかし理由を
きけなかったのが、すんごく悔しいんだよね……。

でもまあ、いいか？

「……あれ？俺って転生したんだよね？」

最近自分が転生したことを忘れそうになるなあ。

それくらいに、テニプリの世界やテニプリのキャラに慣れてきた
んだろうなあ……。

まあ、それはそれでいいとするか？

「にしても、テニスって結構楽しいよなあ……」

「結構、じゃなくて、やっぱりの間違いじゃないかな？」

「え？」

後ろを見れば、周兄さん。いつの間に居たんだ？

「あ、お帰り周兄さん。今日は早かったんだ？」

「うん。で、陽太はまだいるかと思って小学校の近くに来たら、ボ
ーッと立っていたって訳」

「ボーっとって……なんか失礼だなあ？」

「ごめんごめん。一緒に帰ろうか、陽太」

「もちろん！」

裕兄さんとも久しぶりに話せたし、まあ、今日は良い日だったな！

裕太と王子様（後書き）

次回から中学に入っていきます。

テニス部のメンバーがやつと出せて行けそうです！

今回は陽太以外の人物目線も入れてみました。

裕太はかなりの弟思いです。不二（兄）に似て。

今回出てきたもう一人のオリキャラ、柚子ですが。

まあ、ぼちぼちでてくると思います（笑）

ちなみに陽太はテニス強いです。

うーんと……不二（兄）よりもちょっと上、ぐらいです。

これからもっと強くしようかと（笑）

中学と王子様（前書き）

さて、いよいよ中学です。

誰から関わって行きましょうかね？

とにかく頑張ります！

中学と王子様

周助 side

「不つて！アレが言ってた弟？」

「うん、そうだよ。すごく緊張してた男の子。あれが弟の陽太」

入学式が終われば、英二が僕に話しかけてきた。

今日は青春学園の入学式で、いわゆる陽太の中学校デビューだ。入学式では転んだりしないかなと心配してたんだけど、まあ大丈夫だった。

制服姿の陽太を見れば、嬉しさが凄くこみ上げてきた。

「やっぱ不二と似てたなあッ！すぐに分かったよっ」

「でしょ？姉さんが言うには、容姿は僕に似ていて、性格は裕太に似てるらしいね」

「テニスの実力とかは？」

「さあ、それはどっちだろうな」

教室に戻りながら話していると、またさっきの陽太の姿が蘇る。

陽太の栗色の後髪は耳の下くらいまであつて、前髪は強制的にひとつに結ばせた。まるで女の子見たいだったのを思い出して、すこし笑ってしまう。

つまりは額が丸出しの状態、と言えはわかるかな？でも本当に似合ってるんだよね。

さてと。陽太が中学校生活を楽しく送れる様に、僕も一年間だけどしっかりサポートしないとね。

s i d e o u t

……恥ずかしい。

いや、入学式で失敗したとかじゃない。前髪を上で結んでいるからだ。

朝、周兄さんに言われてやったこの前髪。もちろん嫌だといったさ、俺は。だけど、だけどだ。

あの周兄さんに開眼されて、すごい圧力かけられて、尚も嫌と言えるところか？

……俺の答えはNOだ。実際そうだったしな。

「ねえ」

「え？ああ、なに？」

「そこ邪魔なんだけど。どいてくれない？」

「あ、ごめん」

初会話がコレかよ！？誰だこいつ！？言っとくけど、実は俺お前なんかよりもかなり上なんだぞ！？

まあ、確かにブーツとつつ立ってた俺も悪いんだけど……。

ちよつとむしゃくしゃしながら配られていたプリントで俺に今声をかけたやつの名前を見る。

「越前……リョーマ？」

「……なに？」

「あ、なんでもない。気にすんな」

聞こえてたのかよ……。

にしても“越前リョーマ”か。……そんなキャラいたっけかあ？

いや、もうテニプリなんて興味無かったから内容忘れてるし。にしても、たぶん主人公もこの学校だったと思うんだけどなあ……。どいつなんだろう？

あ、とにかく越前にテニスをするか聞いてみよう！

「えーっと……越前、くん？」

「なに？というか、アンタ誰だっけ？」

「……不二陽太」

「ふうん。で、なに？」

「越前君もさ、テニスとかしてんの？」

「……まあね」

「え、してるんだ」

「それが何？別にアンタには関係ないでしょ？」

「え、あ、ごめん」

「……なんで謝ってんだろ、俺。」

でも一応、こいつもテニスするんだ。じゃあテニス部で関わる可能性、ありかな？

しかしだ！こんな生意気な口悪い奴が主人公の訳はないだろう！

「……ねえ」

「なんだよ」

「プリント。落ちてた」

「あ、どうも」

……会話が長続きしないのは何故なのだろうか？

まあ良い。ちなみにさっきの言葉は微訂正する。彼にも優しい面はある様だ。

「あ。ねえ！」

「……今度は何だよ？」

「さっき、“越前君もさ”って言ってたけど、アンタもテニスすんの？」

「あ、うん」

「ふうん。……アンタ、強いのか？」

……強いのだろうか？自分では良く分らないんだけど。

「こういう場合はどう言えばいいのかも、俺は良く分らないんだが……。」

「わからない。いつそのこと、また今度試合する？」

「……いいよ」

それきり前を向いた越前。……もう越前でいいよな？

クールな奴だなあ、越前つて。にしても主人公はマジで誰なんだろうか？俺、ホントよくわかんないんだよなあ。

そんな時、俺の席の隣に誰かが座った。おっと、もう座らなきゃいけないのか。

という事で俺も自分の席に着く。すると、隣の席に座った奴が、すごく笑って話しかけてきた。

「よお！俺、堀尾！隣の席、よろしくな！」

「……不二陽太。よろしくな、堀尾君」

「堀尾で良いよ！俺も不二つて呼ばせてもらおうし！」

「んじゃ、堀尾ね」

とにかく一人、友達ができたのかな？うん、そう言う事にしよう。

にしても“不二”だったら、周兄さんと被る様な気もするが……まあいいか。いや、良くないか？

「なあ、堀尾。俺の事、陽太つて呼んでくれたらいい」

「え？陽太、でいいのか？」

「うん。三年にも不二つて人いるの、知ってる？」

「ああ、知ってる知ってる！青学テニス部で有名な不二先輩だろ！そついえばお前、同じ名字だな！」

「あつははは……」

兄弟です。

ん？にしても、堀尾はテニスの事を詳しく知っているのか？

「堀尾、テニスすんの？」

「よつくぞ聞いてくれました！俺、テニス歴二年なんだ！」

「二年？」

「そう！テニス歴二年！ま、テニス知らない奴に言っても意味無いと思うけどな！こう見えても俺は……」

さあて、読書でもしようか！

……いや、耳疲れるし。たぶん堀尾、そんなに強くないと思う。直感だけ。

部活は今日からでも行けるらしいが（仮だけど）、周兄さんが昨日「明日は僕達はいないから、本格的な入部は明後日くらいだと思う」って言ってたな。

んじゃあ今日は帰るか。面倒くさい事があっても困るし。

「陽太！」

「っ！？」

目の前にニユツと現れた顔に俺はどぎもを抜かれる。……マジでビビった。

「前髪意外にも似合ってるよー」

「棒読みで言われても自信わかないって……柚子」

「あっはは！うそうそ！陽太と同じ前髪してる子いたけど、陽太の方が全然似合ってるもん！」

「……余計に自信無くなった」

男の方が似合ってるってどういう事だよ、おい。

昔から、周兄さんや裕兄さんに結構童顔って言われてきた覚えはあるけど……ここまでとは。

「で、なに？柚子、やっぱりテニス部はいんの？」

「あつたりまえじゃんっ！女テニだよ、女テニ！でもって絶対に陽太を倒すから！」

「はいはい、のんびりとお待ちしておりますー」

「うわ、なめてるでしょ？」

やっぱり柚子は女子テニス部か。……やっぱり俺もテニスじゃないとな。

あ、でも周兄さんと被るか……。いや、逆にテニス部に入らなかつたら開眼されそうだな。アレ、何か寒いぞ？

その後は先生の話をきき、後は部活の申し込み！……だが俺は行く気が無い。

そんな時だった。

「……何帰ろうとしてんの？」

「は？」

顔をあげればまさかの越前！めっちゃ睨まれてるんだが。

「いや、なんとなく」

「テニス部入るんでしょ、アンタ。不二……だっけ？行かないの？」

「行く気はない！」

「……なに格好つけて言ってるのさ」

アレ？つつこみ上手？

とにかく俺、行く気ないんだけどさ。さて、どうやってまこうかな？

「まあ、行く気が無いんだったらいいけど」

あれ、まけた？

……でも目がかなり鋭い。これは行った方がいいかもなあ……。

一応テニスバッグは持ってきてるし……ラケットは一本しか入れてないな。あ、パワーバンドは二つ入れておいたっけ。

まあ、損になる様な事はないだろうし、行っておくか。

「はいはい、行くよ」

「……別に行かなくても良いけど」

「可愛くない」

「……可愛いって言われても嬉しくないね」

冷静に返すよな、越前。

とにかく……。柚子も頑張るみたいだし、俺も頑張らないとな。今日はボール触れないとは知ってるんだけどね。

「じゃ、行こうか。越前」

「……一つ聞いて良い？」

「いいけど？」

なんだ？越前からの質問とは？

「なんで前髪あげてんの？女みたいじゃん」

「……………言うなよ」

俺、女みたいっていわれることが一番嫌なんですけど……。

「俺の兄さんに強制的にあげられた……って言うておく」

「なんで反抗しなかったの？」

「したさ！したけど……。ウン、モウコレ以上言ワセルナ？」

背筋に寒い物が走ったぞ。

……とにかく！テニス頑張つて、周兄さんにぎりぎりじゃなく勝てる様にならないとな！

……で結局、主人公誰なんだろう？自立つ奴だと思っただけかなあ？

中学と王子様（後書き）

最初はリヨーマです!!

陽太は彼が主人公だと言う事を完全に忘れてます（
いいのか？って感じですが、後に陽太も知ります。
不二（兄）の黒いのが目立つような……。

グダグダ文章申し訳ございません……。
こんな小説ですが、どうぞよろしくお願い致します。

缶倒しと王子様（前書き）

後書きか活動報告を必ず見て置いてほしいです!!

缶倒しと王子様

越前と一緒に、テニスコートがある場所へと向かう。

「越前は何歳くらいからテニスしてたんだ？」

「……とにかく小さいころから。俺の親父もテニスプレイヤーだから、物心ついたころにはもうしてたかな」

「へえ。早くからやってるんだな！」

まあ、俺も一応小さいころからはやってるんだけどな？

それから堀尾とも遭遇し、俺達三人は軽く会話をしながら歩いていた。そんな時だった。

「おつとお」

「そんで……ブフッ！」

いつてえ……。顔面うつたぞ？いや、マジでいたい。

誰だと思いき前を見れば、ツンツンした髪先輩が一人立っていた。あーっと、コイツどこかで見たことあるなあ……。？という事はレギユラーキャラかな？

「前見てあるかねえとぶつかるぜ？……ってぶつかったな。大丈夫か？」

「こ、こちらこそすいません……。大丈夫です……」

本当は顔面がジンジンして超痛いんだけどな……。さすがに言えない。

相手の先輩は、俺と越前を交互に見ている。……。つか実際俺の方が先輩なんだよ！？だって精神的な年齢かなり上だから！……。言えないけど。

「おまえら、これまた随分でつかいバッグ持ってたんなあ」

「……………」

放っておけ。俺はこれでも小さめのを選んだんですけど？

越前はというと、相手の先輩を睨みつけるように見ている。身長差があるから、そう見えるだけなのかもしれないけど。

すると相手の先輩も越前の目線に気づいた様で、眉をひそめる。

「おまえ目つき悪いなあ？」

「……………」

今度は俺の方を見て、ニカッとすんげえ笑う。……。嫌な予感。

「おまえはなんか女っぽいな！なんつか、童顔？」

「……………行こうか、越前、堀尾」

「あ、おい、待てよー！前見て歩けよお、前ー！」

なあにいがあつ！前見て歩けじゃツンツンがああああッ！

俺はね！童顔って言われるのが一番嫌なんですよ！それが最大級のコンプレックスなんですよ！変えられない事なんですよ！でも言わなくても良いだろ！？

「……不二」

「あ？なに、越前？」

「怒ってるの丸分かり。しょうがないじゃん？不二、童顔なんだからさ」

「……カバーしてくれよ」

胸が痛い……。周兄さん、裕兄さん、助けてくれ……。

そんなこんなで俺はイライラを抱えながらもテニスコートに到着。
……結構設備の良いテニスコートだな、ここ！

「おおーっ！さすが青学、設備いいじゃん！」

「だなっ！こんな所でテニス出来ると思うと、なんか楽しみだなっ！」

しかしまあ、本当に設備が良いんだ。周兄さん、ずっとこんな所でテニスしてたんだなあ。

これから俺もここでテニスをしていくのか……。さらに楽しみになってきた！

「よっし！ いったちよ派手に入部と行こうぜ！ 越前、陽太！」

「ダメだよー？」

やわらかな明るい声が俺達を止める。声の方向をたどれば、そこには俺達と同じ一年の、水野と加藤がいた。

「今日は三年生とレギュラーの二年生達が遠征でいないから、仮入部は明日からだって」

あ、周兄さんの言ってた通りだ。

ヨシ、帰ろうじゃないか！ という気を込めて越前を見れば全くその気なし！！

「僕達はちよっとうっていこうかなって」

「……陽太、俺達もうっ？」

「は？ まあ、別にいいけど……」

というかいつのまに陽太って呼ぶようになったんだい、越前？

んじゃあ俺もリョーマと呼ばうじゃないか。リョーマ。うん、やっぱり名前で呼ぶ方がいいな。

その時、コート内に居た二年生の二人がでてきて、俺達に声をかける。

「おい、おまえら。うちのテニス部に入んのか？」

「「あ、チーッス！」」

俺とリョーマをのぞく三人が挨拶をする。……だって俺、実はまだイライラしてんだよ？

先輩、つてのを見るだけで何かがキレそうになるのさ！！

「一年の、水野カツオです！」

「加藤勝郎です！」

「へへへ……堀尾聡史っす。名門の青学に入れて光栄っす！こう見えてもテニス歴は二年でしてー……」

はいはい、自慢はいいから黙ろっじゃないか！二年はわかったよ！

にしても、俺も言った方がいいのかな？よし、リョーマが言ったら俺も言う事にしよう！

「おい、そっちの二人。名前は？」

「「……………」」

俺とリョーマの無言が見事に重なる。言っ気ないからね、正直言っ

「てめえら、聞こえねえのかよ！」

「まあいいさ。……にしても童顔の方、誰かに似てるような……？」

うん、また何かがキレたよ。小さいけど童顔って聞こえた。

「なあ、実は良いゲームがあるんだけど、やってみねえ？」

「「ゲーム？」」

「あ、アレか……。そうそう！アレやってもらわねえとな！」

アレとかゲームで何するか分かりますか、先輩？

イライラするなあ……。ところで俺を童顔って言った方強いのかなあ？テニスで倒してやらないと気が済まない。

俺を童顔呼ばわりした奴が、コートの手あたりで缶を置いた。

「ルールは至って簡単。むこうからサービスを打って、十球以内にこの缶を倒せたら、賞金一万円」

「ええーっ!？」

ひっかかるなよ！絶対嘘だろ!？というかひっかけだろ!？

堀尾達、あの二人の先輩とやらの表情をしてみる！真つ黒だぞ？どす黒いぞ？あの妖しすぎる笑みを見たらわかるだろ!？

「まあ、入部の儀式見てえなもんだ」

「挑戦料として一人二百円。……やる？」

「一万円だってよー！」

「「当然やるっす！」」

もう知らない……と言った感じで俺とリヨーマはそれを見ている。

フェンスにゆっくりともたれかかりながら、少し呆れた様な表情で堀尾達を見ているリヨーマに話しかけた。

「リヨーマはやらないのか？」

「まあね。そういう陽太こそやらないの？」

「俺、さっきぶつかった先輩の件でイライラしてるんだ。今ラケット握ったら、缶じゃなくてあの二人の先輩狙いそうだから」

「……ふうん。陽太って童顔って言葉に反応するけど、別に気にする事ないと思うよ。まあ、どうでもいいけどね」

「……そりゃどーも」

あ、なんか頭にのぼってた血がさがってきた。

……そうだな、気にする事ないな！気にしてしまうんだけど。リヨーマに感謝だなあ、ここは。

そうこうしているうちに缶倒しゲームとやらは始まっていた。

柚子 side

「あ、小林さんも女子テニス部に入るの？」

……誰だっけ？それが一発目の感想。

女テニに入部届けを出しに行こうとした時、鉢合わせになったおさげの女の子。名前は確か……竜崎さんだったっけ？

「うん。そういう竜崎さんもテニス部？」

「あ、ま、まあね！小林さんもテニス部何だったら、一緒に頑張ろうね！」

「うん、そだね。ちなみに柚子でいいから！」

そういえば、陽太はもう入部届け出したのかな？

そんな時だった。私と竜崎さん、それに小坂田さんの前に女性が立ちふさがる。

「ねえー！あなた達テニス部へ行くの？それ、入部届けでしょ？はあ、助かったあ！ねえ、連れてって？」

「はあ……?」

「ん? あ、ごめんね! 紹介が遅れました! 私、月刊プロテニス編集の……ってあなた!？」

「私、早く入部届け出したいんです。来るなら早く来て下さい!」

「え、あ、ああ! ごめんね!」

なんか足止めくらった気分だな……。

そんなこんなでゆつくりと私は、この人が求めているであろう男子テニス部のコートに向かった。

s i d e o u t

ボールがうたれて缶に向かう……があたらない。

これで水野君と加藤君の二人が終わった。

「はい、ざんねーん! 君達二人終わりだよ」

「なんだよ、下手ツピだなあ」

「そんな事言われても……僕達テニス初めてだし、あんな小さいのに十球ぽっちじゃ当たるわけないよ……」

「……テニス歴二年！堀尾、行かせていただきます！」

「おおー！」

堀尾はなかなかの自信があるみたいだけど、はたしてどうかな。

一球目、二球目、三球目、四球目……と堀尾はボールをうつていくが、一球もあたるところか掠りもしていない。……なんだこれ、ギヤグか？

「あれええ……？」

「おいおい、あと一球しかねえぞ！」

「ちくしょう。こんなの、百球やってもあたんないよ！」

十球目のボールは、缶に向かっていく。あ、当たるか！？

と思っただがボールは缶を掠めて終了。……あれ？缶って軽いから、結構簡単に倒れるよな？

しかも堀尾の打ったボールは結構な所を掠めた。普通だったら倒れるはず。

……つまりだ。あの缶には、何かがあるってことだよな？

「あの缶、石入ってるね」

「あ、やっぱり？そう言う系だと思っただけ……」

コソコソと言った感じでリョーマと会話する。やっぱりそう言う系だったか。

「はい、残念でした！」

「やっぱり難しいっすね。挑戦料の二百円って……」

そう言うのと堀尾達三人は二百円を出して二年生二人にさし出す。

……というかポケットに入ってたのか？金入れて部活にきてるのかよ！？ま、まあ、漫画の世界だしそこは触れなくていいか……。

「はあ？何勘違いしてんの、お前ら？」

「サーブ、缶倒しゲーム。一球五百円、挑戦料二百円、んで一人あたまで五千二百円」

「ええっ！？そんなあつ！？」

「そんなお金持ってないよお！」

持ってた方がビックリするっての！？

「自分の下手さを恨むんだな！」

「おい、そのチビと童顔！お前らも見えてないでやれよ。自分だけ助かるうとしてもダメだぜ？」

「どーがん……」

「いちいち反応しない、気にしない。で、勿論やるよね、陽太」

「当たり前じゃん!」

時間もかかるので、俺とリヨーマで交互にうつていく事になった。

最初がリヨーマ、その次が俺、その次がリヨーマって感じで互いに十球ずつうつていく。

「越前、陽太。やめとけて。絶対あたんねえよ!」

「……普通あてるだけじゃ倒れないよ、あの缶」

「へ?」

「な、何言ってるんだよ?」

ほっ、とぼけますか先輩方?

「石、入ってるんだろ?簡単に倒れないように」

「なっ……」

「はい、先攻リヨーマよろしく!」

「了解」

リヨーマはボールをあげ、それにしっかりと強弱をつけて打つ。

ボールはピンポイントで缶の上蓋にあたり、蓋は見事に外れた。

その中から石がかなりの量ででてる。

「あー！！先輩達、ズルしてるー！！きつたねーのー！！」

「つるせえ！！新入生が何言ってるんだあ！」

「……お取り込み中悪いけど、次、俺行きまーす」

「外したらダサイよ、陽太？」

「任せとけて！」

ボールをあげて缶に届くようにうつ。

ボールはゆるやかに回転をしながら、倒れている缶にまた当たった。

「うわ、すつげえ！」

「陽太君もピンポイントであてたー！！」

「はい、次リョーマ！」

「ウィーツ」

リョーマが再びあてる。そして俺もあてる。

うん、これなら百球でも当たりそうな気がするの俺だけかな？

いよいよ十球目。もう面倒くさいし、リョーマと同時に打つ事に

なる。リヨーマのボールとあたらないようにしないとな。

「「せーのっ！」」

俺とリヨーマの打った二球のボールは、ぶつかる事なく缶に向かって行った。

やっぱ百球でも当たりそうだな！

「「百球当てたら、百万円くれんの？」」

アレ？リヨーマと被った。

リヨーマの方を見れば、俺の方を見て、それから小さく笑ってくれた。

「っ……！てめえら、二年に向かってその態度はなんだよ！ああっ！？」

お前らが俺の事を童顔童顔言うからだよ……って違うな。

「ちょっと一年早く生まれただけでさ、こつ言っせこい事して言い訳？」

「リヨーマに同意で」

「……んだと！？」

二人のせこ野郎がこっちに向かってくる。……喧嘩には一応自信あるぞ？

そんな時だった。リヨーマでも、俺でもない。誰かが打った一球の球が、放置されている缶に命中する。

「おおー！当たっちゃったよ！」

「ゲ」

……この声は、もしかしてだ。

「ラッキーー！！」

さっき俺とぶつかり、あげく童顔呼ばわりした奴が、こっちに向かってきていた。

缶倒しと王子様（後書き）

アニメ見ながらって結構大変だなあ。

……と思いながらやり終えた更新でした。

さて、皆さま、いつもこの転生の王子様を読んでいただき、誠にありがとうございます。

実は、841にのつての難題、中間テストが近づいてきております。テスト勉強に励む日を増やしていかねばなりませんので、テスト日の10月20日と21日までは、しっかりと更新して行けるかは分かりません。

ですが、なるべく。いえ、本気で！！頑張って更新していきたいと思います！！

10月20日、21日までは、「できれば」の更新となってしまうですが、どうぞよろしくお願い致します。

一球勝負と王子様（前書き）

部活で心身共々クタクタです……（笑）

それと勉強ですね。

明日は数学がある……と嘆いている841です。

数学はホントに無理です（苦笑）

一球勝負と王子様

明るい声を出してこっちに来たのはさっきのツンツン先輩。

……ダメだ、また頭に血がのぼってきた！

「……おいおい荒井よお。三年がいないからって、か弱い一年生をカモつちやいけねえなあ。いけねえよ！」

アレ？実はかなり良い先輩？

「っ……桃、用事あるから先に上がるわ」

「じ、じゃー！」

あ、逃げてった。……なんか情けねえなあ、情けねえよ？

……と真似してみたが、うん、これって自問自答とやらだよな？
自問自答する先輩か……個性的なメンバーが揃いそうだなあ。

「陽太」

「え？あ、何？」

「帰ろう」

「あ、お、おお」

まさかリヨーマから言ってもらえるとは！

……あれ、そういえばだけど。あきらかにさつきから今までに、リヨーマが一番目立ってるよな？

テニプリで俺の記憶にあるのは、とにかく主人公が目立ってた、だから……。

つ、つまり……リヨーマが主人公、だと！？

という事は、俺は主人公に対して、「そんな名前の奴いたっけ」なんて考えてたのか！？

……馬鹿だ。ああそうさ、俺は馬鹿さ。

「おい、誰が帰って良いって言ったよ？」

フリーズしていた俺と冷静なリヨーマにかかった言葉は、そんな言葉だった。

柚子 side

「こつちですよ」

っだああああー！私は早く入部届け出したいってのにー！

井上つて人も合流して、私は記者の二人を男子テニスコートに案内する。……って、あれ？陽太？それに越前つて子だ。何やってんだろ？

「あれ、陽太？」

「へ？なになに？小林さん、知り合い？」

「あ、まあね！」

「ヨシッ！行こ行こ！」

「のあつ！ちょ、ちよっとっ！！」

なに！？小坂田さんって、積極的って言うかなんて言うか！？

ずるずるとひきずられるように、私は陽太と越前君の元へと連行された。

「あれ？柚子じゃん！」

「あ、うん……」

「……何、陽太？知り合い？」

「まあな！テニススクールで知り合った奴なんだ！結構強いんだ！」

「ふうん……」

越前君はなぜか私を見る。……うん、陽太のせいだね。

「か、かつこ可愛い……」

な、何語ですか！？小坂田さん！？

「桜乃、それに小林さん！！紹介して！！」

「あ、うん。越前リョーマ君」

「……と、不二陽太」

すると後ろからやってきた井上さんが、陽太と越前君をみて何か言いたそうだった。

「へえ〜。お前が越前リョーマで、そっちのどうが……」

「童顔言っな。……じゃなくて、言わないでください」

「え？あ、悪い悪い。そっちの……じゃなくて、そっちが不二陽太か。越前も不二も、これまた随分とちっちなんだなあ」

「「アンタ誰？」」

あ、越前君と被ってる。……というかチビって言われてるし。

陽太、百五十五はあるって言ってたっけ？まあ、どっちにしろチビ？

「二年の桃城武だ。越前の方、顧問のばあさんから聞いたぜ？ツイストサーブ打てるんだって？それに不二の方は、あの不二先輩の弟

みてえだし?」

「ゲッ!マジ!?!」

ツイストサーブか。……よし、教えてもらおうかな。

「「だつたら?」」

「……つぶす。でるくいは早めにつつとかないな?」

「なに、俺も?」

「そりゃあ勿論?不二先輩の弟だろうと、容赦なしだ」

「へえ。……楽しみだ」

その時、私は久しぶりに見た。

陽太の妖しげな笑み。とても楽しみそうな笑顔。あの笑顔は……マジでやるきだ。

そんなこんなで、越前君から、二年の桃城武って人との試合は始まった。

s i d e o u t

サーブはリョーマから、という事で試合は始まった。

「ザ、ベストオブワンセットマッチ！越前サービスプレイ！」

審判は堀尾か……。アハハ、かわった方がいいかな？

リョーマのサーブ……。ツイストサーブか。さて。……盗ろうかな？

「頑張れよー、リョーマア〜！」

「ウィーっす」

たとえば、リョーマはサーブを打つ。ツイスト……。ではなかった。

ただ単のスライスサーブ。リョーマ、ちゃんと打ってくれないと、盗れないじゃん？

「フォルト！」

「……いーよ、スライスサーブは。出し惜しみすんなよ？」

「ヤだ」

「なっ！……生意気な野郎めい」

その後もリョーマと……。も、桃城先輩？の試合は続き、あと一ポイントでリョーマが勝つという時。

「ちよつとたんま！」

「…………え？」

「やーめたっ！もういいや。次、そっちの不二！」

「は！？途中放棄！？」

「とちゆ…………！？おいおい、変な言い方すんなよ！？」

でも…………桃城先輩、足怪我してるみたいなんだよな。

リョーマは気づいてると思うけど、堀尾とかは知らない。さて、どうしようかなあ？

流石にゲームは無理だろうからな…………。よし！

「桃城先輩！一球勝負、しましょうー！」

「はっ！？」

「一球勝負です！一球だけ！落とした方の負けっス！」

「ちょ、待てよ！なんで一球…………！？」

俺は俺の足を指さす。…………意味、わかったかな？

…………ああ、分かったみたいだ。困ったような顔してる。まあ、いいか？

「わかったよ。んじゃ、一球だけな。…………フィッチ？」

「じゃあ、スムーズで」

「このサーブは貴重だなあ？貴重だよ」

自問自答はいいですって。

ラケットが回転し、カシャンと倒れる。

「……スムーズだ。不二からだな！」

「……どもっす」

えーっと、確かリヨーマはツイストをこんな感じで……。

一球勝負。落とせば終わり。……負けるわけにはいかないし、俺は負けるつもりはないよ？

「んじゃ、俺からサーブ……行きます！」

リヨーマside

俺が出会った相手、不二陽太。

第一印象は、女っぽい童顔の同性。でも話をすれば、テニスをするって事がわかったりして、案外話しやすい奴、なんて思っ

童顔、って言われたら怒ってんのが丸見えで、少し笑った。

そんな陽太は今、一球勝負中。ツイストサーブは初めて見たようだったけど、どんな感想抱いたんだろう？

「んじゃ、俺からサーブ……行きます！」

お手並み拝見、と言ったところかな。

俺が見た限りでは、陽太は強い。だからこれが終わったら、試合だっと思ってみたい。

そんな時だ。陽太が打ったサーブは……ツイストサーブ。

「なっ!?!」

「!?!」

俺と同じサーブは、あの先輩の顔面向かって飛んでいく。

……結構スピード速い。もしかしたら、俺のサーブより早いかもしれない。

桃城って先輩はギリギリでそのボールを避ける。

「なっ……!?!」

「……うん。はじめてのわりには、結構良かったかな？」

「「は、はじめて!?!」」

俺と桃城って先輩の声が重なる。……つまり、俺のサーブを真似したって事？

しかもはじめてのわりにはって……。俺よりも早い気がしたんだけど。

「って、桃城先輩？一球勝負終わっちゃいましたよ」

「ま、マジかよ……あ、アハハ！終わっちゃったなー！」

……そりゃ笑うしかないよね。

「じゃあ。……今度は、しっかりとゲームしましょうね？」

「え、あ、ああ！もちろんだ！」

「いよっし！リョーマ、帰ろう！」

「……わかった」

おもしろい奴、見つけた。

退屈せずにすみそうだ。

「……やるじゃん」

さてと、いつアンタと勝負できるかな？陽太？

一球勝負と王子様（後書き）

今回はリヨーマ目線も入れてみました！！

というか本当にグダグダスイマセン！！

自分なりに一生懸命やっております……。

……これから勉強してきます！！

数学の提出物を頑張って終わらせてきます（泣）

読んで下さり、誠にありがとうございました。

二年生と王子様（前書き）

くそう、早く試合に移りたい……。
と思う今日この頃です。

なるべく早く更新できるように頑張ります!!

二年生と王子様

ボキゴリベキッ!!

……あれ？今何か、すごい音しなかった？右肩回したらコレだ。

あー……。昨日の無理矢理ツイストのせいだな。超肩いてえー……。今度はしっかりとリョーマに教えてもらおうと。

「あ、そういえば今日は周兄さんがブヘフツ!!」

「チーッス」

あつたまいてえ……!!ご機嫌にも挨拶をしてきたのはリョーマ。

すがすがしい微笑で、テニスバッグ頭におもいきりぶつけてきたぞ!？なんだこいつは、悪魔か!？

「チーッス、じゃない!!かなり痛かったんだけど!？」

「独り言を言ってる陽太が悪いよ」

「はあ!？独り言を言ったら俺はバッグぶつけられんのかよ!？」

「……うん」

「どついつ理屈だよ!？というかその間はなんだよ!？」

はあ……まあいいか。ジンジンするけど。

昨日のツイストのおかげで肩がおかしい。……まあ、初っ端からあれはな？でも、勝てたからいいんだけどな！

「陽太」

「なんだよ？」

「右肩、大丈夫？」

「あー、大丈夫大丈夫……って、え？」

俺、まだリヨーマに肩の事なんも言っていないよな？

「え、って……。顔見てたら辛そうだし、右肩の方がちょっと上がってる。大丈夫なの？」

「あ、うん。……ありがとな」

「別に礼言われることしてないと思うけど。またツイスト教えようか」

「お、嬉しいな！」

リヨーマの印象が、最近すごく変わってきたのが分かる。

最初は無口でクールな奴、なんて思っていた。だけど、今ではすごく優しい奴。まあ、たまにム力つくんだが、それが友と言う奴なんだろうな。

俺とリヨーマはコートに入り、隅の方で準備を始める。そんな時だ。

「……で、おかしいと思ったんだよ」

「なにがだよ、堀尾」

「あの桃城って先輩、足を痛めてて実力の半分も出てなかったらしいぜ？」

「え？怪我してたの？」

「全然見えなかったけどなあ」

そんなこと知ってるんだけど、堀尾。

だから俺は一球勝負にした。……マジの一球で終わってしまったんだけどな？

「……だからこの前いたんだよ！他のレギュラー陣は試合でいなかったからね！」

呆れたよ、堀尾。……お前は何が言いたいんだ？

リヨーマと目を合わせれば、同じく溜息をついていた。……そりゃそうだよな。

「おい。聞いてんのかよ、越前、陽太！」

「全然」

……って言ってる時点で聞いている事になってただけだね。

「む……。まあね、一年のお前らがレギュラーと互角の筈がないよな。」

「リョーマ。俺、準備できたけど？まだ？」

「ちょっと待って……。っと。できた。軽く打っていいのかな。」

「いいんじゃない？」

「お前ら無視しすぎだつてば！？」

堀尾……喋ってる暇があったら、ちょっとは何かすればいいのにな。

と、そんな時。ニユツと二人の二年が俺とリョーマの前に立ちふさがる。……また二年かよ。

「凄い一年ですっげえ強いってのはお前らか？」

「凄い一年？」

「……すっげえ強い？」

……誰だよ、そんな噂を流したのは。

「俺らじゃ……ないっすよ。」

「は？あ？そうなのかよ？」

「そうっす」

……とつとと失せろよ。

おっと、本音が出そうだ。俺はそれを抑えて、かなり頑張っ
て笑顔を見せた。

「俺らよりも凄い奴、いますよ？な、リヨーマ？」

「うん」

「じゃあ、誰だよ？」

俺とリヨーマは顔を見合わせる。……よし。

二人で同時に振り向き、うんちくばかり凄い堀尾の方を指さす。

「「アイツ」」

「アイツか。……なるほどな。一人派手なウェアで目立ってやがる
なあ。よし」

「サテト、ヤロウカ、リヨーマ」

「片言すぎるだろ」

すまない、堀尾……！！そんなつもりはなかったんだよ……！！

と、朝練は終わり、俺とリョーマは教室で話をしていた。席はちよつと離れてるから、俺がリョーマの席の所に行く。

「というかさ、あの先輩。……荒井先輩だっけ？なんかほんとイラつく」

「童顔って言われるから？」

「言うなよ！！……まあ、それもあるけど。なんかもう、昨日の缶倒しゲームと言い、何と言い……。なんなんだって感じだよ」

「まあ、分かんなくもないけど。ああいうの、やりがいありそう」

「潰しがいい、ってことか？……確かなな。俺、荒井先輩とやって痛い目見させたいなあ」

「発言黒いよ、陽太」

「え？マジで？」

黒発言をしたつもりはないんだけど……。

あ、周兄さんの黒属性をうけつい……。もうこれ以上言わないでおこうか。開眼はかなり怖いから。

「陽太、肩は？」

「ああ、大丈夫。いざとなれば左使えるし」

「え？……陽太も両利き？」

「あ、まあね。リョーマもだろ？昨日左に持ち替えようとしてたし。俺、右利き。でも一応左も使えるんだ」

「俺は左利き。……逆だね？」

「確かに。なあ、今度ツイスト教えてくれるのか？」

「もちろん」

「ありがとうな！でもって、また試合しような！」

「……もちろん！」

よし、約束成立だ！

そしてダルイ授業も終わり、いよいよ部活！あ、今日は兄さんがいるんだっけ？

まずは走り込みから始まった。……堀尾とかゼーゼー言ってるけど、大丈夫か？隣で走るリョーマは至って普通の涼しい顔なんだけど。

……ぶつちやけ俺もあんまり疲れてないな。

「だああーっ！！なんでこんなにつらいんだー！！この練習はあー！！」

「大丈夫か？堀尾？」

「お、おお、陽太サンキュー……大丈夫だ……ってお前なんだよその涼しい顔はー!!」

「うえ？あ、いや、つ、疲れたよ？」

「嘘つけえええつー!!」

「嘘じゃねーよっー!!」

「ごめん、嘘です。リョーマの方を見れば、「まだまだだね」とか呟いてた。

休みがあるわけもなく、次は腹筋五十回。……うげ。俺、腹筋はあんまり得意じゃないんだけどな。

「陽太、やろっ」

「え？ああ、いいよ」

まずは俺から。一、二、三、四……っつと。

やっぱり腹筋好きじゃないなあ。でも、だいぶ前よりかは楽にできるようになってきたかな。

「五十……っつと」

「へえ、早いね陽太。じゃ、次俺ね」

「よし。ちゃんとおさえるから、頑張れよ」

「当然」

……ってリヨーマ腹筋スピード早っ！！

いいなあ、腹筋得意って。あ、でもさっきリヨーマは早いって言うてくれたっけな。

と物思いに浸っていれば、既に数は四十九！！

「五十……っ」と

「……あ。リヨーマ、何か来たよ」

「……なにが？」

俺とリヨーマは、同時に二年の荒井とその後ろに居る二人を睨みつける。

……なんか言いたそうだな。そんな時、荒井……でいいよな。先輩っけんのも嫌だし。荒井は俺とリヨーマのバッグが置いてあるところを見る。……あれ？狙われてんなあ。

「お前ら、少しくらいできるからって、調子こいてんじゃねえぞ。童顔の方は不二先輩の弟って聞いたけど、せいぜい不二先輩に迷惑かけないようにしろ！！」

「……んだよ。アンタらが俺らに関わるから、俺とリヨーマがいざこざに巻き込まれてんじゃん」

「陽太の言うとおりだね」

「なっ……！！てめえら、マジで調子こいてんなよ！！あぁっ！？童顔の方！不二先輩の弟なら、もっとしっかりしとけ！」

「周兄さんの名を俺達のもめ合いでそんな簡単にだすな！！」

「いちいち不二先輩不二先輩って！！兄さんは関係ないだろ！？」

「だーっ！っ！！もうホントに鬱陶しいな！！」

「ま、まあ……。とにかく、今日はレギュラー陣が帰ってくるんだからな。あんまり生意気だと、この荒井様が……」

「あ」

「き、きた……！！」

「きた？なにがだ？」

「そう思い、みんなのしている方向を見る。……そこには、噂の青学レギュラーがいた。」

「先頭に居るのはバンダナをつけた先輩。その次が、四角い眼鏡をかけた先輩。次は何処か真面目そうな、坊主頭の先輩。お次は俺の兄さんだ！！最後は頬に絆創膏を貼った先輩。」

「……うん、個性豊かそうだな！！というかバンダナ先輩なんか恐い！！」

「チーッス!!」

全員が挨拶をすれば、坊主頭の先輩が優しく笑って言った。

「新入生も部の雰囲気慣れてもらいたいから、空いてるコートで自由に打っても良いよ」

「は、はいっ!!」

みんな、「ヨッシャーッ!」とか言ってかなり喜んでるなあ。

……つと、周兄さんだ。目が合えば、二人で小さく笑いあった。なんか兄さん嬉しそうだなあ。

「陽太!」

「ん?どうしたんだ、リョーマ?」

「打っていいらしいから、今度こそ打とうよ」

「あ、うん!」

さてと、右肩をちょっと慣らさないとなあ……。そういや、周兄さんには何も言っていないけど、ばれてんのかなあ。

そんな中、レギュラーのアップは始まった。

ああ、見たことあるな。一人がロブを出し、それを置いてあるかごに向かってスマッシュで入れる。周兄さんと裕兄さんがやってたな。

「あ、相変わらずだな、うちの先輩達は……。おい、分かったか！まぐれくさいツイストサーブが打てるからって、お前ら一年の出る幕はねえんだよー！」

……ダメだ。いちいち腹立つ。

と、そんな時。少し大きめのロブが、リョーマに向かう。

……打つ気だ。リョーマは綺麗なフォームで、そのボールを打ち返す。ボールは結構なスピードでかごに入った。

「なっ……………」

「……………」

「う、嘘だろ……………」

みんな放心状態。……まあ、そりゃあそうかな。

あれ。……周兄さんは相変わらず笑ってる。さ、さすが？

いち早く我に返った荒井が、リョーマに突っかかる。……いい加減にしろよ？俺だって我慢の限界があるよ？

「はい、そこまで」

「っ！？」

「いい加減にして下さい。それに、コート内でもめたら……………」

「コート内で何をもめている」

俺の言葉を遮ったのは、堅苦しそうな、それでも力強い声。

……わお、これってホントに中学生？ちょっと年齢疑うね！……
ゲフンゲフン。きっと部長だろう。眼鏡をかけた身長の高い先輩が、
コート内に入ってきていた。

「部長！チーッス！」

「……騒ぎを起こした罰だ。三人とも、グラウンド十周」

って俺もかよ！？

「ちょ、ちょっと待って下さいよ！こいつが……」

「二十周！」

んなあああつ！？コイツ追加させられやがったあつ！？

……まあ、いいけど。

「陽太。行こう」

「うん」

俺とリョーマはグラウンドに出て、のんびりと走りだす。

「陽太。さっき、サンキューな」

「え？俺、何かしたっけ？」

「……気づいてないならいいよ」

「はい！？教えてくれないのかよ！？」

「……………」

「無視すんなよ！？」

「喋りながら走ってたら体力消耗するよ？」

「あー、そうだな。……って違うっ！！」

よくわからんが、とにかくリョーマの役に立てたって事でいいか？

二年生と王子様（後書き）

ギャグがニガテです……。

はぁ、疲れました。

もう本当にグダグダな文章で申し訳ございません!!

感想を下さるお方、お気に入り登録をして下さるお方。

この小説を読んでくれているお方、誠にありがとうございます!!
これからも頑張っていきます!!

ボロラケットと王子様

その後俺とリヨーマは走り終え、コートに戻った。戻れば一年生は素振りをしている。

「あ、リヨーマ君に陽太君。もう終わったの？」

「うん。次、何したらいいんだ？」

ちよっと辛そうなカチロー君に聞いてみる。……いや、本気で辛そうだ。大丈夫か？

「一年は素振り百回だってよ！早く入れよ！」

「あ、うん……」

「どうしたんだ？リヨーマ？」

なんか困ってる？周りを見回してるけど……探し物か？って、ラケットないのか？

「リヨーマ、ラケット忘れたのか？」

「……いや」

「んあ……。俺の貸してやる！」

「どうも。……って言っても、陽太のラケットもない様な気がするんだけど?」

「……は?」

おお、本当じゃないか。……ラケットがない。

おおかたあの二年の仕業だろうな……。リョーマと俺のラケットを隠す、か。よし、探してやろうかな。俺、かくれんぼで見つけんのは得意だからな。

「ラケットも持たずに来るとは、いい度胸じゃねえか」

「……」

きた。……荒井と取り巻き風の二人。すごい悪そうな顔してんなあ。

「素振りなんか必要ねえってか?」

「期待の新人君、それに天才不二周助の弟だからってちやほやされてるからな!」

……ちやほやされてるっけ? まあ、されてるって事で良いか。

「陽太」

「ん? どうかしたか?」

「……珍しいね。陽太は熱血だから、怒ってんのかと思った」

「熱血って……ま、よくキレるけど。なんかもう慣れてきたよ」

「へえ」

熱血って言うか……うん、大人になれ俺。いちいち反応するな！
怒るな！

……と言うかマジで慣れたんだよな、この二年生達に。さて、ラケットどうするかな。このままじゃ素振りもできないし……マジで探そうかな。

「そんなに自信満々なら、相手してくれよ？」

「そっちの童顔も、自信あるんだろ？ちやほやされてるぐらいだしなあ？ほら、相手してくれよ？」

「でも、ラケットが無いんじゃないかな？」

……童顔にもなれたな。リョーマにも言われるくらいだし。

さて。……何をしかけてくるかな？

「ほい、荒井」

「……フン」

荒井はリョーマに、ガットも緩くて、とても汚れている古いラケットを投げつける。

俺には物凄く意地汚い笑顔をよこしてきた。

「お前はこのチビを潰した後で、この荒井様が相手してやるよ」

「……そりゃそりゃ」

ま、とにかくリヨーマが潰してくれるだろ。……リヨーマに勝てるわけないじゃん？荒井みたいな奴がさ。

いや、頑張れば行けると思う。でも、こんなことしたら、いつまでたっても上手く慣れないよ？

「で、相手してくれるよな？期待の新人君よお」

「……………」

さて、リヨーマはどうすんのかな。俺はリヨーマの後らしいからな……。

周兄さんの方を見れば、相変わらず笑ってる。……兄さん、笑ってないでなんとかしてくれよ。

「はっ！一年のお前には、そのラケットがお似合いだぜ。これにこりて二度とでしゃばんじゃねえぞ！」

「リヨーマ……」

「お。おい、そっちの！……お前がやるか？運がよければ、ラケットもでてくるかもしれねえぜ？」

「……」

……やっぱりか。さて、どうしようかな？ちよっと笑ってリヨーマを見る。

リヨーマも俺も見て、小さく笑う。……さて。勝ったらラケットは本当に戻ってくるのかな？

「いいですよ。やりましょうか！リヨーマ、ラケット！」

「……行けんの？」

「任せとけて。……絶対ラケット取り返すからな」

リヨーマからボロボロのラケットを受け取り、俺はコートに入る。

……あれ？荒井、まだコートに入って無いじゃん？

「やらないんですか？……俺、準備万端ですよ？」

「っ……！」

……ああ。周兄さんの視線を気にしてるんだ。そんなのいいのにさ。

さっきまで俺の事を余裕で侮辱してたくせにね。……よくやるよ。って、兄さん異様に笑ってるし。楽しそうだなあ。

「……いい度胸だ。こてんぱんに潰してやる」

「へえ……。……楽しみですね」

思いつきり笑ってやった。これ、一番良い笑みだと思う。

「さ、やりましょうか!」

いつもの仕返し。……行ってみよう!

……サーブは荒井から。っと、このラケットでどうやったらうまく返せるかな?普通に打ってもきつとだめだろうしな……?

「行くぞおッ!」

「……………」

周助 side

「行くぞおッ!」

始まった。二年の荒井と、陽太の試合。……陽太、凄い笑顔だね。余裕丸見えて感じかな?

荒井がサーブを打つと、陽太はそれに余裕で間に合いラケットを振る。ボールはあたった……けど、ネットにひっかかって落ちた。

「あぁっ……………」

「やっぱり……あんなラケットじゃ無理なんだよ……！」

「……おらおらどうした？一度でかい口をきいたんだ。最後までやつてもらっぜ。……オルア！」

再び荒井はサーブを打つ。再び陽太はボールを打ち返す……が、コントロールがうまくいっていない。

ボールは荒井を超えると、フェンスに当たって落ちる。

「……陽太」

ねえ陽太。……右腕を動かすたびに、なんでそんな辛そうな顔をしてるんだい？

「うーん……」

「どうしたんだよ、不二。弟が心配なのか？」

「あ、いや。試合については心配ないんだけど……。ちょっとね」

「不二の弟、どんな実力なんだろうな」

「ああ。……そこは心配ないよ」

陽太が負けるわけないだろう？……ほら。凄く考える顔してる。

「英二、乾」

「ん？どうした？」

「……陽太は負けないよ？しっかり見ててやって？」

「へえ」。凄い自信だな、不二」

「まあね。……僕の弟だし」

「……不二は大の弟好きというデータが取れたな」

あれ？乾、今さら気づいたのかな。

陽太だけじゃないけど、ね。裕太も姉さんも、僕は家族は大好きなんだけどなあ？

「……おもしろいなあっ！」

「……っ！？」

陽太が明るく声をあげれば、荒井は酷く驚いた後、意地悪気な笑顔を見せた。

「……てめえに勝ち目なんかねえだろうが！」

荒井がサーブを打つ。と同時に陽太はかけ出し、体をグンと引く。

そのままボールのタイミングに合わせて、体を回転させた。ボールは見事に荒井のコートへとかえっていった。

「か、返した……！！！」

「マジかよ……」

「おおー。体を回転させてスピンをかけたぜ」

「……流石だね」

もう一人の一年の方を見れば、陽太と笑い合っている。

「あのラケット、意外とぼろくないのか!？」

他の二年生が何か叫んでいる。

「ええーっ!？それはないだろー!？」

「音が変わでしょ」

「え。でも、あの球めっちゃめっちゃはやかったじゃん!？」

「めっちゃめっちゃおそいつてのっ……」

陽太は溜息をついている。その横ではもう一人の一年。越前リョーマ……だっけ？

が陽太を見て小さく笑ってる。

「ふ……ふざけるな!!一球返したからって……!!」

「一球?ああ、もう一球どうぞ?……何度でも返してやるよ」

陽太の童顔が、その時は凄く大人っぽい顔に見えた。

「さ、さすが不二先輩の弟……」

「天才・不二周助先輩の……」

「違うよ」

二年生達が呟くから、僕は今度こそ言っ
てやった。

「陽太は陽太。僕が兄とか……関係無いよ」

「へっ！？あ、す、すいません！」

ねえ、陽太？君は僕に対してどんな感情を抱いてるのかな？

……裕太と同じように、君も行ってしまふのかい？

「……おい、不二」

「え？あ、ああ。ごめん英二」

「いや？ボーっとしてたから、大丈夫かなーって」

「……ありがとう」

陽太は何球も返していた。……コツは掴んだみたいだね。

荒井はかなり焦っている。そんなの、陽太に勝てると思う方がおかしいよ？……言ったら悪いかな。

「……来るな、アイツ」

乾が呟いた。……そう、陽太は来る。僕達と同じ場まで。

「ああ。それに、もう一人の方もね」

越前リョーマ、の事だね。……そうだな。あっちもきそうだね。

ってアレ？越前リョーマが……いない？

「ちつくしょう……!!」

「……ねえ、先輩。そろそろ終わりにしません？」

“やるだけ無駄ですよ”なんて言葉が聞こえた気がして、少し笑ってしまった。

「俺は……負けません、からっ!!」

「っ!!」

荒井が打ってきたサーブを、陽太は思いっきり打ち返す。

さすが。……もう完全にコントロールしてるや。

「つと……。陽太!!」

「ん？ああ！リョーマっ!」

あ、戻ってきた。……ってラケット持ってる。探しに行ってたん

だ。

陽太は自分のラケットを持つと、にんまりと笑った。

「先輩？ちゃんと、最後までやってもらいますよ？」

「俺もつすよ？……というか、するんでしょ？」

「あ、いや、そ、その……」

あはは、ひいてるひいてるー。

「も……、もういいんじゃない？」

「たかが“練習”試合だぜ？」

「そ、それにもう一人の方もまた今度やればいい事だし……」

「「……ヤだ」「」

あ、ハモっちゃってる。

にしても……帰ったら、右腕……肩かな？しっかりと見せてもらわないとね！

side out

大石秀一郎 side

不二陽太。……あの不二の弟で、その才能は素晴らしい物。

越前リョーマ。……竜崎先生が言っていた、噂の一年生。

「どう思う、手塚？」

「……規律を乱す奴は許さん。全員走らせておけ」

「え？……レギュラー陣もか？」

「全員だ！」

そう言つと手塚は教室を出て行った。……やれやれだな。

「……おやあ？」

「？どうかしたんですか、竜崎先生？」

「いやあ、これを見ても」

さしだされたのは、ランキング戦のトーナメント表。

……ああ。全く。本当に手塚は。

「越前リョーマ、不二陽太。両方書いてありますね」

さて！これからが楽しみだな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3292x/>

転生の王子様

2011年10月18日23時13分発行